

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

韓国の飲酒作法

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 朝倉, 敏夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5820

韓国の飲酒作法

朝倉敏夫（国立民族学博物館助教授）

はじめに

韓国には、飲酒にまつわる話が多くある。

これらの話を集めた文献として、李景燦の『韓国人の酒道』、李外秀^{イウ・エス・ホ}による『エッセイ・酒』といった著作や、徐燦永^{ソドン・ヨン}の「韓国の飲酒礼法に関する考察」、李勳鐘^{イフン・ジョン}の「酒と礼節」などの論文がある。それらの中には、

梁柱東^{ヤンジュ・ドン}の『文酒半生記』、朴斗鎮^{パクドゥ・ジン}の「酒縁記」、卞榮魯^{ピョングン・ル}の「醕酏四〇年」など、酒を友として人生を歩んできた作家や詩人による随筆や、趙之薰^{チョジフン}の「酒道有段」、チェ・スンボムの「酒中守則」など、酒はかく飲むべしを綴ったものがよくとりあげられている。

韓国の文人たちによって書かれた、酒をいかに楽しむか、酒はいかに飲むべきかといった話には、二つの特色が見られる。一つは、

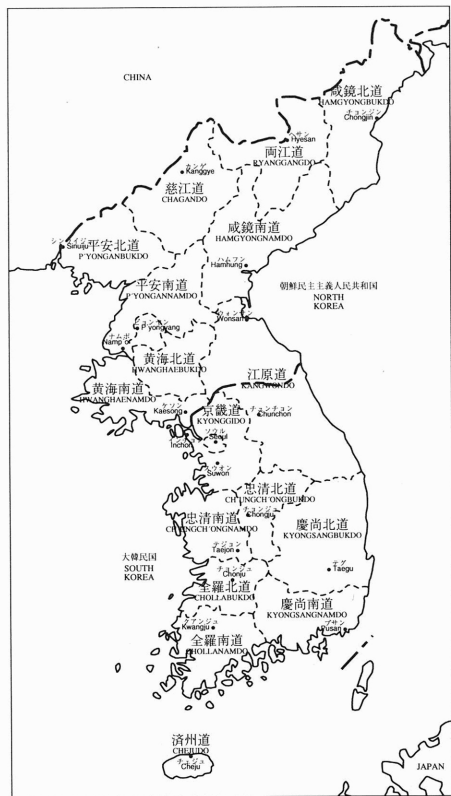
孔子や老荘思想、李白や杜甫、林語堂など、中国の飲酒論が多く引用されていることである。もう一つは、『韓国人の酒道』という本の中にも「ソンビ（儒学者）社会の酒道」という章がもうけられているように、儒教の教えに則った酒の礼節が強調されているということである。

儒教は孔子を創始者とする実践的倫理思想

とその教説であり、中国では漢の時代に政治権力と結びつき、封建社会を特徴づけるイデオロギーとしての地位を確立したが、その後二五〇〇年の間に何度も批判され、一九六〇年代から七〇年代にかけて孔子と儒学者を批

判する「批孔批林」運動が展開され、孔子は完全に葬られてしまった。一方韓国では、李朝五〇〇年の間儒教を国教とし、孔子と儒教を信奉する人々を養成する「郷校」が各地に建てられ、その教えは社会のすみずみにまで浸透した。そして、それは現在も社会倫理、生活規範の本となり、礼節としてさまざまな形で生きている。本稿では、韓国社会におい

◆図表1 朝鮮半島



て、こうした儒教の教えと関連して、酒の作法がどのように伝えられているかを見てみることにする。

一 韓国社会における飲酒

韓国では、酒場において独り酒という姿を見ることはほとんどない。人が集まり、そして酒を楽しむ。多くの場合、それは侃侃諤諤^{かんかんかくかく}の議論を伴い、時として喧喧囂囂^{けんけんしょうしょう}たる様相を呈してくる。

文化人類学者の崔吉城^{チェギルソン}は「韓国における酒」という論文において、「酒は他の物に比べて誰にでもすすめやすい性格をもっている。ス

ルインシム（酒人心）という言葉はこのことを意味する。（中略）一人で飲むよりは、他人と交盃しながら社会的交際、あるいは集団的雰囲気合うように酒の効果を発揮させることが、酒を飲むことに關して一般的に望まれていることである」〔崔吉城 一九七六・一九〕と述べている。また、社会学者の崔在錫^{チェジュク}も、その著『韓国人の社会的性格』の中で、韓国社会での酒の効用について、その第一に共同体の結束の促進をあげ、「飲みたくない酒でも、自分の集団や共同体のためには飲まなければならず、酒によつてはじめてかたくるしく気づまりな雰囲気と融和させることができる。いまでもたいていの宴会は、

酒が飲める飲めないにかかわらず、酒ひとつによつて統一されているのが特徴である。酒の飲めない者は話し相手にもならず、正常な成員とみなしてもらえない場合がある」〔崔在錫 一九七七・一七六〕と述べている。つまり、韓国社会では、酒はまず独りで飲むものではなく他人と共に飲むものであり、また酒を飲まないものは共同体の成員としても認められないのである。

二 酒はオルンの前で習え

韓国社会では、このように他人と一緒に酒を飲むことが一般的であるが、その場合に最も強調されるのが儒教的な礼儀である。ことにオルン（年長者、目上の者）と一緒にの酒席においては、必ず両手を添えて酌をしなければならぬ。飲む時は目上の者と顔を合わせないようにして、必ず横を向くかあるいは後ろを振り返るような姿勢で飲まなければならない。また、目上の者と一緒の席で酔っぱらって礼儀を忘れることは、この上もない失態とみなされる。

酒において儒教的な礼儀を教える言葉が、「酒はオルンの前で習え」である。韓国の農村生活を通して、そこに生きる人々の生活を活写した嶋陸奥彦は、この言葉の意味を、「酒を飲むと酔っぱらって礼儀にはずれる行

動に出がちである。しかし、オルン、すなわち年長者のいるところでは常に礼儀作法に気を配っていないなければならないので、酒に飲まれないように緊張することになる。だからオルンの前で酒を飲めば、礼節をふまえて酒を飲む習慣ができ、道にはずれることはない」〔嶋 一九八五・三七―三八〕と解説し、こうした礼儀作法が農村において忠実に守られている状況を説明している。

近年、都市の方からだんだんと儒教的な礼儀作法が薄れていく傾向にあると言われているが、酒とタバコに關する礼儀作法は都市においてもかなり厳しく守られている。

◆写真1 左手を添えて、右手で酒を注ぐ



朝鮮の食文化を研究する鄭大聲も「儒教化の一つとして一般に日常の礼俗作法はきびしかった。いまでもその名残りが厳然として存在する。食作法がそうであり、酒をいただくマナーもしかりである」と述べ、「父親や年配者の前では飲酒は慎むのが原則である」という飲酒の礼儀とともに、「来客の接待での酒食のもてなしは、男性客に対しては家人といえども女性が膳や料理を運ぶことはしないし、酒を注ぐこともない。隣り部屋に準備された酒食類を男性が客前に運び、酒を注ぐことになっていた」〔鄭大聲 一九九二・四〇四一〕という酒の接待での礼儀を紹介している。

このほかにも、もともと目上の人に対しては杯を合わせるような乾杯をしないが、乾杯をする場合には、相手の杯より自分の杯を下にして乾杯をしなければならない。酒を注ぐのは、相手の杯が空いてからにしなければならない。といった酒の席での礼儀は、日常の酒席で容易に観察することができる。

三 『韓国民俗総合調査報告書（礼節篇）』に書かれた酒礼

こうした酒の席での礼が、各地でどのように伝承されているのかを知るために、『韓国民俗総合調査報告書（礼節篇）』によって調べてみた。この報告書は、総論と基本礼節に

次いで、韓国各地方の生活礼節、儀礼礼節、血縁礼節、社会礼節についての調査結果が記述されており、生活礼節の一つとして「酒法」があげられている。

まず、韓国北部に位置するソウル・京畿・江原道では、「酒を飲む法は、年長のオルンの前で酒を飲むことはできるが、必ず両手で杯を受け、後ろを向いて飲むのが礼である。杯に酒を注ぐ時は必ず右手で注ぐ。家庭で女性に男性に酒を注いではいけない。これは地域に関わらず、これまで続いてきた酒道である」〔文化財研究所 一九八七・一四六〕と書かれている。

西南部の全羅道では、「今回の調査を総合して見ると、酒法と関連しては大体次の二つが問題になる。一つは父の前で息子が酒を飲むことができるか、もう一つはオルンの前で酒を飲む時、身体を回して飲むのかということである」〔同右書・二八〇〕。前者については、「ここ湖南地方では相当数の礼文家で父子間で酒を飲むことができると考えてきたことが分かるが、一方でこれを禁ずる家もいくらかあることが分かる」〔同右書・二八一〕。後者については、「オルンの前で酒を飲む時、身体を回して飲まなければならないと礼書に書かれているためにそうしなければならないという主張は、全く根拠のない主張だということである。今回の調査で、ある人は身体を回して飲むのが見苦しいという反面、別の人は身体を回して飲むのが自然に見えるといっ

◆写真2 五代祖以上の祖先を墓で祀る時亨祭



た。結局、この点に関しては酒法による明白な結論はないことになり、この地方では家によってそれぞれ施行されてきているというしかない」〔同右書・二八一〕とある。父子間での酒礼とオルンの前での酒礼は、礼文家（礼法に精通しそれを守る人）の間や礼書ではないと指摘するものの、このことが議論されること自体、この二つの問題が人々に広く認識されているという証左であろう。

東南部にある慶尚道では、いくつかの地方ごとに調査がなされている。地方ごとに調査がなされるのも、慶尚道が礼法に厳しい「兩班の故郷」と呼ばれる由縁かも知れない。

◆写真3 時亨祭での飲福



月城地方では、「万一オルンと同じ場所で酒を飲む機会がある時には、下の人が上の人にまず杯をさしあげる。万一オルンが注いでくれる時は、杯を受けて横に若干向いて座って飲み、その杯は膳の上のせす膳の下に置く。オルンが再び酒を勧める時には、再び膳の下に置いた杯に受ける。オルンの前では三杯以上飲まないのが礼儀であり、また礼を知るオルンは三杯以上勧めもしない。万一酒を飲めないとか飲むのがいやな時には杯を受けて膳の上にのせておき、その状態や都合をオルンに暗示的に見せる。酒を飲み空いた杯を膳の上にのせるのは、みな飲んだので、オル

ンにさらに注いでくれという意味で、非常に失礼になる。父子間が酒を同じ席で飲めるのは、祭祀をした後の飲福（直会）の時以外には絶対がない。この飲福酒も三杯以上は飲まない」（同右書・四二二）。

咸陽地方では、「下の人は上の人と酒を一緒に飲むことはできない。ただ飲福時には同じ席で若い人が酒を飲んでも知らないふりをする。礼法によれば絶対にあつてはならないが、譲歩するということである。オルンが飲福酒を飲む時には若い人がその酒の世話をする。世話をする過程でオルンが酒を勧めても飲めないと辞譲する」（同右書・四二二～二二）。

星州地方では、「酒は三杯以上飲まないが、その理由は最初の杯は浩蕩（こうとう）させ、二杯目は淫乱（いんらん）にさせ、三杯目は狂わせるからだという。年長の人とやむを得ず酒を飲む時は、少し斜めに身をおいて飲み、下の人は一杯以上は飲まない。なぜなら二杯以上飲むと淫乱になるためである。酒は必ず下の人が上の人の杯にまず注ぎ、下の人が杯を空けたとしても、空いた杯を上の人に勧める法はない。下の人が上の人の前で酒を飲む時は、少しずつ飲まず一息に飲む。しかし、同年輩同士で酒を飲む時は、少しずつ飲んでもよい。昔は杯で身分を確認することができ、両班は銀の杯をもつて歩いたという。したがって自分の杯は自分が持つて歩いたので、他人に自分の杯を渡さなかつた。これを馬上杯と呼んだ」（同右書・四二二）。

安東地方では、「祭祀をした後に飲福する時以外、父子が同じ席に座り酒を飲む法がない。飲福をする時には向かい合つて飲むことはできず、必ず半分は回つて飲んだ。父母やオルンが下の人に酒を勧めたとしても杯を直接渡すことはない。酒を勧める言葉とともに杯を酒煎子（しゅせんし）（酒を入れるやかん）の横にかけば、酒を注ぐ下の人や子どもが酒を注いであげる。子息が父母やオルンに酒をさしあげる時には必ず杯に酒を注いでさしあげる」（同右書・四二二～三）と、それぞれ記載されている。

最後に、済州道においては、「家庭での特別な酒道法を教える場合は稀であつたが、成人になると忌祭祀を終えた後一杯ずつ飲福する時、一族のオルンの前で酒道を習いもしたが、郷校や書堂など教育機関で習いもした」（同右書・四九八）とある。

韓国における儒教に基づく酒礼は、地域によつて若干浸透度に差がみられるが、李朝五〇〇年の歴史の中で、ほぼ全国津々浦々にまで浸潤したことは間違いない。

四 儒教的教化としての郷飲酒礼

では、こうした酒の席での儒教的な礼儀は、歴史的にはどのようにして伝えられてきたのであろうか。

前述の済州道での調査報告にあるように、酒礼はオルンの前で習うとともに、郷校（地方にある孔子廟とそれに附属した学校）や書堂（漢文の私塾、寺子屋）などで習われていたようである。

その内容については、平木實の「朝鮮時代の郷村における儒教的教化の側面―郷飲酒儀礼・郷射儀礼について―」が答えてくれる。

平木は「郷飲酒儀礼」を李朝時代に儒教的な飲酒礼節を教化するために挙行された儀礼と捉える。「郷飲酒礼」は、中国の周の礼法である六礼、すなわち冠礼・婚禮・喪礼・祭礼・郷飲酒礼・相見礼の一つで、年長者を敬恭し、老人を孝養する義理があることを明らかにし、食べ物粗末にせず感謝して食べなければならぬという本意を論ずる礼節であり、韓末まで郷校や書院で学生たちに教科科目として教えられたものである。平木は「主として『王朝實録』などにみえる基本資料を利用して史的考察を進めるとともに、未公開の新資料として英祖一〇年（一七三四）に江原道鶴城館でおこなわれた郷飲酒礼の儀節をも紹介・活用しつつ、朝鮮時代の郷村社会における郷飲酒礼について考察」（平木 一九九九・二）を試みている。

平木によれば、「郷飲酒礼は、高麗王朝に代わり朝鮮王朝国家が樹立された後、第四代の世宗代に儒教的な倫理・道徳を国民全体に教育・普及するために、その一環として郷村において制度として定められ、確立されて、

全国的に実施されることになった。

この儀礼を実施した目的は、一、長幼の序を理解させる。二、敬老の精神を培う。三、郷村における相互の親睦を深める。四、尊卑の別を理解させる。五、孝道の精神を培う。六、儀礼の作法を通じて礼讓を理解させ、修養させる。などの点にあった。こうした徳目が国民全体に普及することによって良俗が確立され、さらに忠誠心が培われて王道が容易に達成されるというものであった。

王命が下った直後には、郷飲酒礼は確実に実行されたようであるが、地方の觀察使がとくに重視したばあいを除き、時間がたつにつれて疎かになるという傾向があった。けれども実施された郷飲酒礼の記録が各地方で作成されていた事実からして、中央政府には報告がなくても実施されたところが多かったことも事実であったといえよう。さらに朝鮮時代末期の純祖代にはいると、キリスト教を邪教として排斥する手段として、郷飲酒礼が特に強調されるようになったことは興味深い事実である。

民衆の教化という重要な目的・使命をもち、実行しようとした施策ではあったが、具体的にどの程度実効をあげたかについては、実施することの重要性が繰り返し主張されつづけたこと、実施されたあと、風俗が改善されたという報告がなされているところから、国民の儒教的教化という目的を達する上に、一定の成果があったものと位置づけうる政策であ

ったといえよう」（平木 一九九九・二〇・二二）とある。

次に、この郷飲酒礼がいつ頃まで行われていたかについては、鈴木栄太郎の報告から知ることが出来る。

鈴木は「朝鮮総督府『朝鮮の郷土娯楽』（昭和一六年刊）によれば、郷飲酒礼は郷土娯楽として現に各地で行われているように述べている」と文献の上では日本植民地時代においても行われていると記述しながらも、昭和一八年三月八日から二三日にかけて朝鮮半島を旅行した結果、実際には「いずれの土地においても郷飲酒礼について聴取することを忘れなかった。（中略）しかし現在行われているところは一カ所もなかった」（鈴木 一九七三・二二四）と報告している。そして、この旅行の間に数カ所において郷飲酒礼についての聞き書きを行い、「朝鮮における郷飲酒礼は主として文廟において今より約三、四〇年前まで行われていたのである。その趣旨には敬老という事はそれほど主要な事ではなく、飲酒における礼の修練といったようなものであった。日本における茶道が、茶を中心としての社交生活の芸術化あるいは儀礼化というなら、朝鮮における郷飲酒礼は酒を中心としての社交生活の芸術化あるいは儀礼化という事ができる」（鈴木 一九七三・二二二）と述べている。昭和一八年、すなわち一九四三年の調査時から約三、四〇年前までは郷飲酒礼が行われていたというのだから、一九〇

○年を前後する頃までは行われていたことになる。

さらに、これが行われなくなった背景としては、「この郷飲酒礼は、日帝（日本帝国主義）の侵略を受けた後、義兵謀議をする集まりとして利用された。日帝は憂国志士を集める方法としてこの儀式を利用することを摘発、その後この儀式の挙行を禁止した」〔徐燉永^{ソドンヨン} 一九八六・一七四〕ということがあげられている。ちなみに、消えた郷飲酒礼が「七四年ぶりの一九七九年十一月一日、成均館大学の明倫堂前庭で韓国青年儒道会により三時間ほど所要して再現された」〔徐燉永 一九八六・一七四〕という報告がある。

おわりに

現在の韓国社会において、郷飲酒礼が一部の儒林を除いて一般の人々にどれほど知られているかは疑問であるが、飲酒に際しては礼法を守らねばならないといった強い意識が残され、実際の行動として儒教的な礼法が守られているのは事実である。では、韓国社会でなぜかくも儒教的な礼法がいまだに遵守されているのだろうか。

その一つは、韓国社会では儒教の教えが社会制度化されていることがあげられよう。日本でも「親孝行」や「長幼有序」といった儒

教の教えにもとづく言葉はあるが、それが祖先祭祀をはじめとする社会制度にまで結びつかなかった。韓国では、親孝行の教えは、生前の親に対してだけでなく、死後の親に対してもなされるべきである。これを具現化したのが祖先祭祀である。この祖先祭祀が、四世代の間、各祖先の命日と、元旦や秋夕（陰暦八月十五日）などに家で、五世代以前の前の祖先たちに対しては、毎年一定の日に墓で、執り行われる。時ごとに、酒の礼も子々孫々に教えられてきたのである。

もう一つは、行動様式のコード化であろう。前述したように、韓国では、酒を注ぐ時、注がれる時には、片手ではなく、両手をそえなければならぬ。また、人にものをわたす時、受け取る時にも、片手ではなく両手をそえるのが礼儀である。韓国で買い物をする時、レジの女の子が横を向いて友だちと話ながらも、必ず両手で品物を渡す姿を見かける。心はともかく、客に対する礼儀としての行動様式はしっかりと身についているのだと感心してしまう。

私自身、日本人同士でお酒を注ぐ時、注がれる時も、自分の左手が必ず右手にそえられているのに気づいて、苦笑いすることがある。すっかり韓国的なマナーになっているからである。こういう場合には、こういう行動様式をとるというコードが確立していることは、どのように行動したらよいかわかり、よほど楽である。こうすれば敬意を表す行為なの

だと分かっているれば、そのとおりにすればよいだけである。ともあれ、酒の席はお互い敬意をもてる人同士で飲むのがなによりと思うのである。

◆参考文献

朝倉敏夫 一九九八年「韓国の飲酒文化についての覚え書き」石毛直道編『論集 酒と飲酒の文化』

頁四〇三〜四二五・平凡社

嶋陸奥彦 一九八五年『韓国農村事情』PHP研究所

鈴木栄太郎 一九七三年「郷飲酒礼」『鈴木栄太郎著作集』V 頁二二〜三三・未来社

徐燉永 一九八六年「韓国の飲酒礼法に関する考察」『韓国食文化学会誌』一（二）頁一七一〜一七六

崔吉城 一九七六年「韓国社会における酒」『親和』二六九・頁一八〜二三

崔在錫 一九七七年「韓国人の社会的性格」学生社

鄭大聲 一九九二年「朝鮮の酒文化」『月刊しにか』三（二二）・頁三六〜四一・大修館書店

平木 實 一九九九年「朝鮮時代の郷村における儒教的教化の側面」『天理大学学報』一九〇・頁一〜二五

文化財研究所芸能民俗研究室 一九八七年「韓国民俗総合調査報告書（礼節篇）」文化公報部文化財管理局

◆プロフィール

朝倉敏夫（あさくら・としお）

一九五〇年、東京生まれ。主な編著書に、『食は韓国にあり』（弘文堂）、『日本の焼肉 韓国の刺身』（農文協）、『変貌する韓国社会』（第一書房）などがある。